事務局 amateur スタッフによる **フォロー・アップ メモ・ランダム**

古代史や神話に関心を持つ人なら天照大神や大国主命についてはよく耳にします。現存する伊勢神宮や出雲大社とこれらの神格の関係についても多くの情報が書籍にもなっているし、特別番組として放映されることもしばしばです。山陰以外の古代史ファンにとっては、これらの神格はスーパースターと言っていいでしょう。県外育ちの友人もそんな一般的な古代史ファンでしたが、出雲国風土記に触れてかなり戸惑う思いをしています。風土記にはたくさんの国つ神が出てきますが、大国主命は飛び抜けた別格扱いで当然だと思っていたのですが、出雲では大神と呼ばれて、大国主命と比肩する神格が3柱も記録されているからです。記載情報の多少によって大国主命を含めた4柱は全く同列対等とは言えない気もするのですが、これらの神格を紹介する一節には並列的に淡々と書かれているようです。講師はその内の佐太大神をクローズアップしてくれました。

加賀潜戸から的島を望む

大陸や半島から先進文化が流入し易い日本海に面する山陰ですが、旧石器や縄文の時代から各地に人は暮らしていたと思います。灌漑稲作技術が伝わると人々の暮らしは豊かになり、各地の集団と時には競い合い、時には協調していたのでしょう。今日的な観点からすると、それらの集団の中から他より勢いの強い部分が成長し、時代とともにその勢いが移動したことがあるのでしょう。勢力の変遷には、集団を構成する人々の移住にその原因を求められるものもあったかも知れません。意宇の熊野大社と出雲の杵築大社の関係をそのようにとらえることもできると思います。しかし、山陰の歴史は意宇が始まりではなく、その前段階として佐太大神が存在したのではないかと気付かされました。恵曇の浜に陸揚げされた文物や技術は佐太大社周辺を中継し、この地域の開発促進、収穫増大、人口流入、勢力拡大に貢献し、さらに内陸に伝えられていったのでしょう。また、加賀神崎も陸揚げ地の一つであり、その人智を圧倒する景勝と相まって伝承の発信地となったはずです。海上交通を担う海人は龍蛇信仰を持っていますが、加賀の潜戸は天地創造の時代の巨大な蛇（神）の棲み処だったと信じられていたのかも知れません。これこそ大穴持（オオナムチ）だったのではないでしょうか。

佐太神社

画鞆 ⇒ 恵伴 ⇒ 恵曇

出雲国風土記によると「『国形、画鞆(えとも)の如き哉。吾が宮は、是処に造事らむは』。故、恵伴と伝ふ。神亀三年、字を恵曇と改む。」とあります。“鞆”とは弓矢を射る際に、弾かれた弦の衝撃から腕を守るための道具のことですが、地形図をどう見立てたら鞆に見えるのか分かりません。聴講中は、矢を入れる靫(ゆぎ)と間違えるほど現代人には縁の薄い武具ですが、記紀に応神天皇の誕生にまつわる記事が書かれるほど注目度の高いアイテムだったようです。“鞆”や“伴”が“曇”に比べて劣る字のようにも思えないのですが、改めるべき何か特別な事情があったのでしょうか・・・・

鞆を着用した射手。『年中行事絵巻』より

四大神、残る野城大神

狩野先生に触発されて御所市の鴨三社を訪問した友人は、鴨都波神社周辺でサラギと読ませる難読地名を見つけました。『蛇穴』を当ててサラギです。古代葛城の稲作民にとっても蛇は神の使者か、神そのものだったようです。

さて、4柱の最後は野城大神ですが、「ノギ」とも「ノシロ」とも言うそうです。3月の狩野先生は、「城」の字を「シロ」と読むのは「山背」を「山城」に変えてからだと言うことでした。風土記が書かれた時代との関係からも考察できるのかも知れません。講師の次回講義で解き明かされるのを大いに期待しましょう。

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　（体裁は自由ですが、文書でお願いします）